

# 国木田独歩、 偶然性の場所

——『鎌倉夫人』における  
遭遇の構造について——

荒木優太

## 序、太公望の哲学

「自然」「小民」「驚異」「死」「運命」「シンセリティ」。一目みて分かるように、何れも明治短編小説の名手にして後の近代文学に大きな影響を与えた作家国木田独歩の重要なテーマ群である。『武蔵野』『牛肉と馬鈴薯』『空知川の岸边』『運命論者』などの代表作を中心として、今日までの独歩研究は、それぞれ扱い方と強調の程度に個人差はあれど、それらテーマを独歩文学の本質と見做し、様々な文脈のもと繰返しそれらを鍵語化して、研究が進められてきた。定本版の『国木田独歩全集』（学習研究社）が昭和五十三年三月に完結してから今日まで多くの蓄積のある独歩研究がそのテーマ群を多様な方向に展開されてきた歴史があることは、適当な独歩文献目録にある論考に冠された題名を参照すれば一目瞭然だろう。そこでは、冒頭に述べた言葉が数多く躍っている（註一）。

本稿は、その歴史に対して異議を申し立てるものでは決してない。しかし国木田独歩には、言語化されなかったけれども、諸テクストを通じて繰返し表出される隠れたテーマが存在し、それが未だ研究の俎上に乗せられず放置されているように思われる。本稿の目的はそのテーマを発掘し、それを中心とした新たな独歩論を展開するための足がかりを作ることにある。

そのテーマを私は「偶然性」と名づけたい。

独歩は決して「偶然性」の語を使用することはなかった。それ故、独歩研究はその語をめぐって考察を展開することはなかったけれども、彼のテクストがもっている一定の傾向性に適当な名前をつけようとするならば、その語は決して無為な読み込みはないことが分かる。死後間近、病に臥せる独歩が口述筆記させたエッセイ『病牀録』（明四一・七）から、凝縮的な部分——これを私は太公望の哲学と呼びたいのだが——を読んでみよう。

「大海及び大河に糸を垂れて釣するは悠長なりと云ふ人あり。されど、そは未だ水と魚との関係を知らざる人の言なり。広き海、大なる川にても、魚の集まれる所は極めて狭く、魚の通過する道は極めて細きものなり。其集まれる所、通過する所を選ばずして糸を垂るゝこそ愚かなれ。之を知り之を選んで糸を垂るるは、決して愚かなる技に非ず。

人は、地球上の凡ての棲息すべきものに非ず。大海の上にて人を釣らんとするは愚かなれども、ロンドンの市街、東京の市街を見て一網投ずる時は、幾人かの人を獲ん事決して難きに非ず。釣魚の業亦理のみ。

又釣魚の楽しみは、釣れる時と、釣れざる時とあるが故なり。魚の見えざる水に糸を垂れて、釣れるか釣れざるか分明ならざる其所に釣魚趣味はあり」（『病牀録』）

直接、語を使用していないので分かり難いが、この魚釣りのメタファーで語られているのは「偶然性」と名づけるべき概念についての問題だ。しかし、少し注意しておかねばならないが、この偶然性を *accident* や *chance* と訳してはならない。フランス語に訳すならばコンタンジャンス *contingence*（英訳ならばコンテンジェンシー *contingency*）とすべきだ。*contingence* はラテン語の *con*（共に）＋*tangere*（触れる、接する、タッチする）という言葉から来ており、異質なもの同士の接触によって予定調和的必然性を壊すような偶然性が発生するというイメージによって形成されている（それ故、本稿で使用されている「遭遇」は *contingence* の意識であり、偶然性＝遭遇と表記すべきような言語的連関をもっていることは注記しておきたい）。つまり、ここでいう偶然性とは、接触や出会いの問題性を孕んだ言葉であるのだ。

さて、この文章が何故、*contingence*（偶然性＝遭遇）を語っているのか、詳しく考えていくことにしよう。文章の要点は三つある。

第一に、偶然の遭遇は稀にしか起きない。というのも、「広き海、大なる川」に象徴されるように世界は広大で、無限の空間のなかで動く対象と交差的接触を図ることは至難の技だからだ。

第二に、しかし、その偶然的遭遇の確率を高めることは不可能ではなく、「広き海、大なる川」「大海」といった無限の空間のなかにも、対象が選好するような密集地（「集まれる所、通過する所」＝「ロンドンの市街、東京の市街」）が存在する。それを見極め、そこで待機することで、一見「悠長」にはたから見えるが、その実、遭遇の確率を格段に高めることに成功するのだ。

第三に、しかし、その高確率化した遭遇の可能性は決して、必然性を産むものではなく、依然として純偶然性と呼ぶべきような賭博的な側面は決して消去できない。インプット（例えば穴場で釣りをするだとか、餌を変えてみるとか）とアウトプット（どんな魚に出会うのか、そもそも釣れるのかどうか）の対応の安定化の努力はできても、決して確定はされない。そして、「釣れるか釣れざるか分明ならざる其所」身を託すことにこそ真の「釣魚趣味」がある。

このような読解を経たあとで独歩文学を概観してみると、いくつかの場面場面が興味深く浮かび上がってくる。例えば、独歩の文学において、魚釣りの場面は、しばしば重要な人間との遭遇や接触の場面への導入であることがある。

一つ典型を挙げれば『河霧』（明三一・八）などが分かり易い。『河霧』は二十年前意気揚々と故郷を出て上京した上田豊吉が、零落して帰郷してくるその感傷を描いた短編小説だが、地元に戻ってきた豊吉は「少年の釣場」である大川の支流の小川で、釣りをしていた兄の子供源造と偶然出会い、「何ともいえない懐しき」に奮える。魚との出会いがスライドするかのようになり、人との出会いにすり替わっているのだ。

他にも、『富岡先生』（明三五・七）、『肱の侮辱』（明四〇・一）、『都の友へ、B生より』（明四〇・七）や、或いは一一厳密に言えば魚釣りではないが一一主人公が「魚叉」で魚捕りを楽しむ場面がヒロインとの重要な接触点となっていた『帰去来』（明三四・五）といったテキスト群は、『病牀録』で示された太公望の哲学と呼ぶべき釣魚と偶然性＝遭遇の結びつきを大なり小なり表現している。

この文脈の上で、もう一つ浮かび上がってくるのが、本稿が取り扱う『鎌倉夫人』という独歩の鎌倉蟄居時代に作られたテキストである。このテキストでも勿論、釣り人が登場し、偶然の出会いが果たされるわけだが、他のテキストにみる以上により明瞭に、このテキストには太公望の哲学が貫徹されている。それは、先取りの的にいえば、都市と地方をめぐる問題設定と偶然性の問題との接続と要約できる。本稿では、『鎌倉夫人』の読解を題材に、太公望の哲学のより深化した理解を目指す。それは恐らく、独歩文学の見逃されてきたテーマ、「偶然性」への考察の一助となるはずである。

## 一、『鎌倉夫人』の太公望

短編小説『鎌倉夫人』は明治三十五年、『太平洋』（十一月）に発表された。この小説は「上」「中」「下」という三段構成で、その内容は文学者である「自分」が己の下にやってきた数学者柏田勉からの手紙をそのまま公開するという体裁で進行する。

物語自体は単純で、舞台は鎌倉の由比ガ浜近く、柏田勉が、かつて結婚していた杉愛子とその新たな恋人 篁のカップルと出会い、そのことに関する柏田の内的な思い出と感傷が描かれる。

このように、物語そのものにダイナミックな展開がみられない『鎌倉夫人』は、先行研究において独歩の伝記的事実を補完するものとして読まれてきた。というのも、独歩自身が明治二十八年から二十九年の間――有島武郎の名作『或る女』のモデルで有名な――佐々城信子との婚約と離婚を経験しており、独歩と柏田が同一視されることで、恋愛事件での独歩の心理を知ることができるように思われてきたからだ。後で批判することになるが、平野謙は次のように作品の解説を試みている。

「『鎌倉夫人』は独歩の作としてはキラリと光るところのない凡作に属する。だが、わたしが着目したいと思つたのは、それが駄作か秀作かということよりも、この作を思いつた作者のモチーフに、一種の俗念がかくされてあるということだ。「ハイカラ毒婦」とか「本能満足主義の勇者」とかきめつけることによって、現実のモデルを傷つけたい一種の報復心みたいなものが、作者の内心にはかくされている」（平野謙「作品解説」／『日本現代文学全集 18 国木田独歩集』収、講談社、昭三七・三）

平野は文学作品としての『鎌倉夫人』の評価を放棄し、作家の心理を注釈する一種の資料としてテキストを理解している（註二）。勿論、柏田という男の設定と独歩の生涯の類似などを考えてみたとき、杉愛子のモデルが佐々城信子であることは自明で、その上で作品に文学的価値が認められないのであるならば、嫉妬心や攻撃心を中心とした作者独歩の「俗念」の開示だとみなすことにはそれなりの正当性がある。

しかし、『鎌倉夫人』の価値を単なる伝記の注釈書としてのみ見なすならば、それは見誤った判断だと言わざるをえない。例えば、詳細は後述するが、独歩の分身として柏田を見なした時、私信の公開に踏み切った文学者「自分」の存在はどのように理解すればいいのだろうか。その文学者も又独歩の分身だとして、どうして独歩はわざわざ二役（数学者柏田と文学者「自分」）に分けて自身を代行させねばならなかったのか。その二役の関係は如何なるものなのか。注釈書としての『鎌倉夫人』はそれらの問いを亡失してしまう。そして何より、序論で示した通り、『鎌倉夫人』は独歩の隠れテーマ「偶然性」と緊密に関わる太公望の哲学が貫徹されたテキストでもあるのだ。

具体的に『鎌倉夫人』の「太公望」を見てみよう。

「僕は昨日鯊を釣りに行つた。釣りにゆくといふと大変おほげさであるが、釣れても釣れなくても、たゞ太公望然と糸をたれて居て、時間さへ経てば其で僕の目的は達して居るであるから、小さな滑川の畔でも僕の釣には沢山なのである。

君も御存知の橋、長谷から海浜院の前を通つて材木座の方へゆく道にある橋、あの橋の下で、乱杭の上へ蹲まつて釣つて居ると、橋の上を折々人が通る、然し最早秋の中程であるから、通る者は多く地の者で、珍らしさうに他人の釣を橋の上から見物する悠長な都人士は殆ど居ない」（上）

「悠長」に釣りを楽しむ「太公望」。それが、『鎌倉夫人』での柏田勉という登場人物の第一印象だ。そして、この後、愛子と篁が小旅行で鎌倉に訪れ、二人が橋の上で会話する場面に遭遇する。太公望の哲学が比喩していた、魚との出会いから人間との出会いへのスライド、そして第一要点であった偶然性＝遭遇の希少性がここで表現されている。というのも、「秋の中程である」鎌倉には殆ど「地の者」しかおらず、「珍らしさうに他人の釣を橋の上から見物する悠長な都人士は殆ど居ない」。その為、都会人であった愛子と篁

のカップルとの遭遇は一見奇跡的なことのようにみえるのだ。

## 二、太公望イメージ

---

しかしながら、太公望の哲学にはまだ続きがあった。つまり、遭遇の場所の設定によって偶然性発生の確率は変動するということだ。『鎌倉夫人』はこの側面でも貫徹している。

しかし、それを考えていく前に、前提となる知識を確認しておこう。本稿では既に何度も「太公望」という語を使用している。単純に釣り人を表すこの語には、しかし特別な歴史性とそこから含意される意味合いが孕まれていることに注意せねばならない。柏田が「太公望然」に釣りをするという時に、果たしてどんな含意があるのと考えべきなのか。

辞書において、「太公望」とは第一義に次のような説明がなされる。即ち、太公望とは周代の斉国の始祖。氏は呂、名は尚。初め渭水の浜に釣糸を垂れて世を避けていたが、文王に「これぞわが太公（祖父）が待ち望んでいた人物」と用いられ、武王を助けて殷を滅ぼした。そして、そこから転じて釣り人を太公望と呼ぶことになったのだ。

「太公望」とは第一義には、中国の軍師の名であり、彼は実力はあるものの世を隠れて辺境の地で悠長に釣りを楽しむ隠者であった。このイメージは重要で、例えば幸田露伴は「釣師気質の、如何にも長閑で気の長い、〔中略〕こせした世俗の習風を超越してあるやうな、愚とされ耄とされても更に何とも思わぬ、そして腹の中に何か大したものをも有つてあるやうなところを太公望が代表してゞもゐるやうに想はれ」と述べ、「世俗の習風の超越」を太公望＝釣師の含意として認めている（「太公望」／『改造』昭一〇・七）。或いは森秀人は興味深い仕方で太公望の一般的なイメージを提示している。

「太公望が魚を釣っていたのが、渭水にしる、渭水の上流や支流にせよ、とにかく辺境の地である。そんなところで、のんびりと魚など釣っていたって、誰も通りかからないだらう。まして周の文王などという、えらい王様が通りがかって「釣れますか」などと声をかける機会など、あろうはずがない」（『黄河の霸王——太公望のナゾ』、講談社、昭五七・一）

森は史実の次元において、太公望が釣りをしていたのが渭水であるという説を否定し、別の場所での出会いの可能性を示唆している。ここではその真偽は問わない。重要なのは、森が前提にしているように、一般的なイメージにおいて太公望とは「渭水」のような「辺境の地」において「のんびり」と釣りをしている隠者であるという点にある。

### 三、境界地帯としての鎌倉

さて、太公望の一般的イメージを確認したわけだが、問題となっていた『鎌倉夫人』の太公望柏田にもそのイメージは妥当するのだろうか。その回答は、一見然りと答えることができるように見える。何故なら、人気のない橋の下で「悠長」に釣りをしている姿は伝説として伝えられている太公望のイメージそのものといっているからだ。

しかし、柏田勉を一般的な太公望のイメージで読むべきではない。というのも、鎌倉は決して「辺境の地」ではなかったからだ。どういうことか。

テキスト内時代を正確に確定することは困難だが、明治三十五年十月に発表されたこの小説の舞台が、独歩が実際に体感していた鎌倉、より詳細にいえば明治三十五年二月から十二月の鎌倉に強い影響を受けていることは想像に難くない。佐々城信子との離婚の後、『武蔵野』や『牛肉と馬鈴薯』などを発表し、詩人から小説家として目覚めていくなか、独歩は「染々感じたことがある」（斎藤弔花「鎌倉在住前後の独歩氏」／『新潮』明四一・七）という明確さを欠いた理由で斎藤と共に鎌倉に移り住み、そこで明治三十五年二月からの約十ヶ月間を過ごす。何故独歩が鎌倉への移住を思い立ったのかは分からない。しかし、その時期周辺の鎌倉は丁度、古都鎌倉からリゾート鎌倉への移行期間に相当していることは特筆してよい。原田香織は次のように述べている。

「鎌倉は、近代化の波とともに新しい相貌を見せる。〔中略〕それは湘南を中心とした海水浴場と共に発展していくリゾート地としての鎌倉であり、都市と連動する形での避暑地、別荘地、保養地として開発された。〔中略〕横浜在留外国人を対象とした文化は、鎌倉の地において明治時代にいちやくモダニズムの先蹤となり、既にこの地では和風の文化の中に、突出した欧風の文化とハイクラスな風が流れ込んだ。

つまり鎌倉を語るときには、モダンなリゾート地としてのそれと歴史的建造物が並ぶ古都鎌倉という逆方向のベクトルが同時に存し、そこから「鎌倉組」と呼ばれた文士たちの新たな創造性の力が発揮されるのである」（『鎌倉と海水浴』／『コレクション・モダン都市文化 第54巻 鎌倉と海水浴』収、原田編、ゆまに書房、平二一・一二）

明治中期から古都鎌倉はリゾート鎌倉へと変貌し、大都市東京から来る都会人の、例えば避暑や避寒といった訪問先として整備されていった――明治二十二年に横須賀線開通によって東京からの連絡も容易になった――。鎌倉は近代化の波を受けて、明治中期頃から文化的な境界地帯として再成立している。文化的境界とは、リゾート鎌倉と古都鎌倉という鎌倉の二側面を指す。これは、近代と伝統、日本（和風）と西洋（洋風）などの対立的項目で変換できるだろうが、何れにせよ「逆方向のベクトルが同時に」存在したことによって、鎌倉は特別な歴史性をもつ。そして――独歩は所謂「鎌倉組」とはいえないが――、このような変化が、当時鎌倉を訪れ十ヶ月間住んだ作家国木田独歩にも何らかの影響があると推察することは至極至当であるだろう。

実際、独歩は鎌倉の変化を確実に感知している。住み込むために鎌倉を訪れた際の独歩の感想だ。「鎌倉日記」（『明星』明三四・二）は共に鎌倉へ赴いた斎藤弔花との合作であるが、感想の主は勿論独歩である。「朝曇ら〔ママ〕汽車の中より晴れそめて、此時夕陽静に古都の松原に落つと言ふよりも彼方此方の別荘の白き屋根を照らす。麦畠の肥料悪臭を放つて成程鎌倉は異なりとの感を起さしむ」（『鎌倉日記』）

独歩の訪れた鎌倉は「古都」よりも「別荘の白き屋根」が強い印象を刻ませるものだった。「異なりとの感」をもった独歩の印象は正しい。鎌倉がリゾート化に伴って、『鎌倉市史 近代通史編』（吉川弘文館、平六・三）にある下の表をみてみれば分る通り、別荘数は確実に上昇していく。「別荘」は地方における来訪者の

表19 鎌倉の別荘戸数および人口対照表

| 年    | 別荘戸数 | 総戸数   | 別荘人口  | 総人口    | 旅客宿泊数 |       |
|------|------|-------|-------|--------|-------|-------|
|      |      |       |       |        | 上     | 下     |
| 明治36 | 270  | 1,214 | 2,165 | 8,376  | 1,250 | 6,380 |
| 37   | 295  | 1,240 | 2,360 | 8,867  | 1,025 | 5,580 |
|      | 25   | 26    | 195   | 491    | -225  | -800  |
| 38   | 320  | 1,260 | 2,240 | 9,267  | 1,115 | 6,300 |
|      | 25   | 20    | -120  | 400    | 90    | 720   |
| 39   | 330  | 1,312 | 2,200 | 9,642  | 1,200 | 6,500 |
|      | 10   | 52    | -40   | 375    | 85    | 200   |
| 40   | 385  | 1,400 | 2,535 | 9,754  | 1,300 | 7,300 |
|      | 55   | 88    | 335   | 112    | 100   | 800   |
| 41   | 400  | 1,460 | 2,805 | 10,140 | 1,220 | 7,380 |
|      | 15   | 60    | 270   | 386    | -80   | 80    |
| 42   | 425  | 1,514 | 3,435 | 10,437 | 1,200 | 7,300 |
|      | 25   | 54    | 630   | 297    | -20   | -80   |
| 43   | 443  | 1,560 | 3,544 | 10,505 | 1,220 | 6,511 |
|      | 18   | 46    | 109   | 68     | 20    | -789  |
| 44   | 461  | 1,620 | 3,327 | 10,907 | 1,100 | 5,551 |
|      | 18   | 60    | -217  | 402    | -120  | -960  |
| 大正1  | 480  | 1,650 | 3,360 | 10,974 | 1,250 | 6,600 |
|      | 19   | 30    | 33    | 67     | 150   | 1,049 |

注 各年次の上段は実数、下段は前年との増減を表す。『鎌倉議会史』にもとづいて作成。

受け皿となり、

文化的境界性は自然、人の混淆的状況、つまり地元民と来訪者の同時存在をもたらすのである。

又、柏田が釣りをしているのは「海浜院」の近くだと本文で言及されているが、この海浜院は元々（明治二十年）皇族や華族や政財界の重鎮らが保養する目的で作られた西洋建築のサナトリウムで、以後海浜院ホテルとして外来者を受け入れてきたことは特筆してよい。「海浜院」は「別荘」と同等のリゾート化のシンボルと考えることができる。

独歩の感想はまだある。次はより具体的に、そのようなリゾート化を批判している。

「鎌倉は此四五年間に著しく変化せり、別荘の数は加倍しつゝあり、従つて商家の多くは飲食物をあきなふべく之れ亦その数を加倍しつゝあり、停車場より長谷寺に到る一條の里路も今は殆ど家並みをして蕎麦屋もあり西洋料理などといふものあり、うかれ女の軒提燈さへ鎌倉山の星月夜をにぎやはす。肥料の悪臭の遂に鼻を打つべく止みて佳肴の美香の行人を掠むるも遠きにあらざらん、さて然る後、鎌倉も遂に俗境たるべき也」（『鎌倉日記』）

「別荘」が増える中、鎌倉は「蕎麦屋」と「西洋料理」屋が並存するような場所となってしまった。和洋の混淆したこの文化的境界は、独歩にとって「俗境」以外の何物でもない。つまり、境界の対立項目は、独



歩からしてみれば、超俗の世界と俗境の世界の対立として変換されるのだ。

このようにみてきた時に、太公望の哲学の第二要点の要求と、鎌倉という特殊な歴史性をもつ場所の意味が符号する。太公望の哲学は、稀少な偶然性＝遭遇であっても、それは場所の設定次第で確率を変化させることができることを教えていた。一般的に考えて、辺境の川辺で釣りをしている、都会人と出会う可能性は限りなく低い。しかし、そこが辺境ではなく、鎌倉という文化的境界地帯であったらどうだろうか。境界地帯は都市からの来訪者の訪問をリゾート化によって準備し、地元民と来訪者の異なる性質をもった者同士の予期不能な接触（con-tangere）を用意する。つまり、「広き海、大なる川にても、魚の集まれる所は極めて狭く、魚の通過する道は極めて細きもの」であって、その通路にはその場所場所に由来した通行者の傾向性が現われるのだ。

鎌倉での柏田と愛子との邂逅。鎌倉は半年間共に住んだ二人にとって思い出の地でもあったが、依然としてその邂逅は古典的な太公望のイメージで読むべきような奇跡的な偶然に委ねられたものではない。勿論、鎌倉停留の多くは避暑客が多く、「秋の中程」という季節設定は純粋な偶然性を与えているといえるが、それでも自身（柏田）が「保養」目的でやってきた「地の者」でない来訪者という当の事実によって鎌倉という場所に於ける人間の混淆状況が十分窺われる。ここでは太公望の哲学の第二要点が実践されているのであり、鎌倉のリゾートの整備が、偶然性＝遭遇の下部構造として機能するのだ。

## 四、情報集積する都市

考えてみれば、柏田は隠者でも超俗でもなく「病氣保養」の目的でやってきた来訪者だった。そのため、彼を隠者と読むことは勿論、純粋な「地の者」と考えることはできない。事実、柏田は鎌倉にありながらも都市との連絡を本文中断つことがない。これは愛子に関する三つの噂話として語られる。第一は数学新報社を訪ねた時のことだ。

「去年のことゝ記憶するが、或る日僕は所用あつて数学新報社を訪ひ外山先蔵に会た。用談が終わると外山は急に様子を変て、卓上に指を立てゝ、「珍聞を聞さうか」と言ふ」(上)

こうして愛子が音楽学校に通い、情夫が二三人いるという「珍聞」が明らかになる。数学新報社は何処にあるか、特定することはできない。しかし、出版社であることからそれが(東京か横浜かは措くとして)都市部であろうことは予測してよい。第二の噂はより直接で、義妹が愛子に会った感想を聞く時だ。

「去年の春であつた。義妹が赤坂の或教会から帰つて来ての話に今日兄上の鎌倉夫人に遇つたといふ。「如何して其が分判つたか、」と聞くと、「私の知つて居る或る奥様が一人の若い方をそつと指して、あれが貴女の義兄の以前の夫人ですと教へて呉れたから分判りました。そしてね、兄上、其奥様の被仰るには彼の人は貴方の義兄に酷い目に遇はしたばかりか、其後さん男を騙して歩いて彼人の為に幾人困らされたか知れはしない、抑々教会などに足踏出来る人じやアないのが何という図々しい人だらうツて呆れてみましたよ」(上)

ここでは「赤坂」という東京の地名でしっかりと記されている。柏田は義妹との接触を通じて、東京での情報を間接的に手に入れる。

そして、最後の噂は柏田自身がもう直接東京へ赴く(「先日、上京した時、甚だしいことを聞いた」(上))。ここで柏田は沖という画家から、愛子が洋行し、その船の船長だった筈と「妖しい仲」になって日本に帰ってきてしまったという情報を得る。しかし、情報の内容自体はどうでもいい。重要なのは、柏田の情報(「噂」)獲得は都市との間接的直接的な接続に由来しているということだ。

中島礼子は三つの「噂」に関して次のように述べている。

「三つの噂は「鎌倉夫人」のなかで、考えようによれば最も重要である。「中」「下」でいかように愛子が描かれようとも、読者は「上」でもたらされた三つの噂による先入観は変わらないであろうし、「中」「下」で展開される物語は、「上」の三つの噂により形成された愛子のイメージをさらに増幅させる働きをするであろう」(中島礼子『国木田独歩の研究』第四部第三章、おうふう、平二一・七)

中島の主張は尤もだが、その一方で付け加えるべきことがあるように思われる。つまり、柏田の情報獲得は全て都市部にその源(ソース)を持っているということだ。恐らく、人口が高密度化する都市は、情報伝達経路(人と人のお喋り)を波及的に多岐化しながら、不特定多数の接続を産む。そして結果的に都市が情報集積の場として機能する。人と共に情報もまた集中するのだ。もし人口過疎地であるならば、限定化された接続が、切断や情報伝達の偏向をもたらすだろう。

重要なのは、柏田が自身の言う処の「地の者」ではなく「病氣保養」のため一時的に鎌倉に滞在している来訪者であり、そして彼は「保養」や「上京」などによって移動をする語り手であるという点にある。彼が鎌倉に留まり続けるような「地の者」であったら、先入見なしに愛子と再会できたかもしれない。しかし、都市との連絡は「強ひて彼の女の其後の成行など聞かうとも思わぬ」(上) 柏田に対して否応なしの知識を事前に形成させるのだ。そしてその事前の先入見は、実際に遭遇した愛子とのコミュニケーションにおいて、一定の制約をもたらすだろうことは容易に想像できる。

## 五、代弁する数学者

---

我々は柏田がもつ一種の二重的性格、つまり元々は都会人であるが来訪によって地元民のように呑気に釣りをするような二重の性格を確認してきた。繰り返すが、ここには下部構造としての鎌倉のリゾート化が機能している。

しかし、柏田の二重的性格はこれに尽きない。「自分」は柏田の私信を公開する前に、次のような注意を施している。

「柏田が文学者でもなく小説家でもなく、純粹の数学者であるだけ、書くことが余り露骨で、艶も飾りもなく時に読者をして聳慄せしめは為ないかを恐れる許」(上)

しかし、「自分」の心配をよそに、柏田は本文中特別「数学」的ではない。そればかりか、寧ろ、多くを語ることのない文学者「自分」を代行するかのよう文学者的な視点からの語りを展開させるように思われる。

例えば、愛子と出会ってからの状況を反省した柏田は「これが小説ならば読者の嘲笑を恐れて君も書くことは出来まいと思ふ」(上)と、小説家としての視点を小説家「自分」を先取りするようにして獲得している。或いは、恋の謎(何度相手が変わっても同じように熱情的でありうるか)を自己提起しても、「其答を得やうとしたけれどもなか数学のやうに式が立たない」と、数学という自己の専門領域の限界を示唆するかのよう、解決が放棄される。そして、最後に至る愛子への評は極めて文学(評論)的な結論だ。「君、君は小説家である。人間の研究者である。だから以上詳しく申上げて問ふ、鎌倉夫人は毒婦であらうか、ハイカラ毒婦だらうか。

僕は君等の所謂本能満足主義の勇者だと思ふ以て冥すべきだらう」(下)

「本能満足主義」とは、明治三十四年当時論争となった高山樗牛の評論「美的生活を論ず」(明三四・八)の言葉である。樗牛のいう「本能」とは性的本能を指し、「美的生活を論ず」はその肯定する論文であるが、重要な点は柏田がこのような文壇的タームを使用して数学者柏田が愛子を攻撃しようとしていることだ。

「自分」の心配にも関わらず、数学者柏田は「自分」を代弁するかのよう文学(者)的に多弁する。柏田は、自身の専門である数学に限界性を見取って、恰もそこから移行するかのよう、文学的領域へ侵犯してくるのだ。つまり、数学と文学こそが、柏田の二つ目の二重的性格だ(註三)。

整理しよう。『鎌倉夫人』というテクストは領域接触のドラマを描いている。第一のレベルとして鎌倉のリゾート化(都市と地方の接触)が挙げられ、それは本来出会う筈のないものの遭遇=偶然性の下部構造として機能し、柏田と愛子の出会いを潜在的に準備する。第二のレベルとして主人公柏田の二重的性格が挙げられ、それは二つの側面から指摘できる。第一面として彼は物理的に移動する語り手であり、地方に住みながらも都市との連絡を絶つことがなく、そこから自然「地の者」と「都人士」との混淆したような曖昧な立場をもつ。第二面としては彼は数学的(専門)領域より寧ろ文学的領域への侵犯を試み、数学者と文学者の立場が結果として移行的に接触する。

第一レベルは環境のレベルであり、第二レベルは内面のレベルであると整理できるであろうが、確実に前者と後者は連動している。例えば鎌倉のリゾート的整備は、都市からの短期的来訪を可能にし、その来訪者は都市との連絡を断つことなく地方に滞在できる。第二レベル第一面は第一レベルからの当然の帰結である。

## 六、沈黙する文学者

以上のように考えてみた時、柏田が自身の専門性から逸脱して、文学者的な視点を仮設的に内面化しているのに対し、当の文学者である「自分」は本質的なことを全く述べておらず、沈黙を自身に科していることが奇妙に思えてくる。冒頭の「自分」の叙述を確認しておこう。

「友人柏田勉から次のような手紙が来た、自分は此手紙を読んで痛く感じたことがある、然し今それを此処では言はない、たゞ柏田が文学者でもなく小説家でもなく、純粹の数学者であるだけ、書くことが余り露骨で、艶も飾りもなく時に読者をして聳慄せしめは為ないかを恐れる許。けれども自分は美文家ならざる此蕪雑な手紙の中にこそ却つて多くの真実を含んで居るやうに思ふから敢てこれを公にしたのである」(上)

本稿の第一章で、平野謙が柏田＝独歩と見做し「報復心」の為のテキストとして『鎌倉夫人』を捉えていることは紹介したが、それでは、文学者「自分」のモデルは誰なのだろうか。恐らくは独歩と断言していいだろうが、しかしでは何故独歩は柏田と「自分」とに分裂せねばならなかったのか。「ハイカラ毒婦」とか「本能満足主義の勇者」とかきめつける」のは柏田勉であって、「自分」ではない。文学者に投げつけられた「鎌倉夫人は毒婦であらうか、ハイカラ毒婦だらうか」という問いに「自分」は応答しないのだ。平野の抱くような理解ではその問いには答えられない。

中島礼子は平野から一步進んで、柏田と「自分」との共犯関係に着目し、愛子を悪者に仕立て上げる「仕掛け」を強化しているのだと指摘することで、その問いに答えようとしている。

「『鎌倉夫人』は柏田勉の手紙を「自分」が受け取り、それを読んだうえで、「多くの真実を含んでいる」との「自分」のお墨付きのもとに、柏田の体験とそれに基づく思惟・考察が展開されるのだから、既にそこには評価がなされているわけである。「自分」の評価のなされたものをさらに読者は読まされるのだから、否応なく柏田の語る内容に同意させられる仕掛けができています」(前掲書、第四部第三章)

しかし、「仕掛け」に組み込まれているのは柏田自身も読者と同じというべきではないだろうか。というのも、柏田は「強ひて彼の女の其後の成行など聞かうとも思わ」ないにも関わらず、意欲することも無いのに都市の住民からもたらされる「噂」によって先入見を事前に構成してしまっていたからだ。もし、「噂」を知らず、愛子との邂逅が果たされていたならば、柏田の心理状態やコミュニケーションの態度は別様なものになっていたかもしれない。しかし、それは鎌倉のリゾート化という領域接触の第一レベルが許さない。ある意味で、柏田の悲劇はリゾート化という都市と地方の接触の問題でもある筈だ。

そう考えれば「自分」が「痛く感じたこと」や「多くの真実」があるとしながらも、その具体性については沈黙するという空所の設定は、「噂」によって構成された柏田勉の偏見の場合と比べて相対的な自由を読者に与えるといえる。中島は「『多くの真実を含んで居る』に「自分」の感想は示されており、「自分」も柏田勉に賛成だということを表明している」と述べ、愛子＝「本能満足主義の勇者」の宣言を「自分」が強化していると考えているが(前掲書、第四部第四章)、この見解は疑問だ。「痛く感じたこと」や「多くの真実」は「今それを此処では言わない」と空所化されており、柏田の「君、君は小説家である。人間の研究者である。だから以上詳しく申上げて問ふ、鎌倉夫人は毒婦であらうか、ハイカラ毒婦だらうか」という問いかけに、「自分」は応答することがない。「自分」が残してくれた読みの自由度を逆手に取れば、都市的なものと地方的なものとの接触もまたこのテキストから読み取れる「多くの真実」の一つである筈だ。

## 結論、領域接触の第三レベル

---

数学者が文学的に多弁する代わりに、当の文学者は何物も積極的に語ろうとしない。しかしその沈黙が手紙の内容に対しての全面的肯定であるかどうかは分からない。彼が行うのは非公式な（informal）私信を「公」の情報（infomation）として発表することであり、その手続きの上で読みの方向性が追加されていたとしても、その具体的読解は明示されない。極端に言えば、「多くの真実」の内に愛子＝「本能満足主義者」という柏田の定式は入っていないのかもしれない。

平野や中島は、愛子（佐々城信子）や女性一般への偏見に満ちた言説としてこのテキストを捉えた。独歩には「女子禽獣論」（註四）という女性蔑視と受け取られても仕方がない思想が認められ、その延長で、テキストの解釈が誘発されること自体は自然なことだ。しかし、国木田独歩という狭義の作家性を括弧に括った時、このテキストからはより大きな問題系が孕まれていることに気づかされる。それは勿論、都市と地方とその間の移動という問題であり、又今日まで独歩研究において焦点化されていなかった場所と偶然性＝遭遇をめぐる問題である。

「自分」の「痛く感じたこと」とは何だったのか。それは分からない。加えて、柏田と「自分」の間柄が具体的に如何なるものだったのか、この文学者と数学者がどのような出会い方で知り合いとなったのか。それも不明だ。しかし、柏田の私信がそのまま公開されるのではなく、（殆ど意味をなさない）「自分」の前置きと共にこのテキストが構成されていることは、中島とは別の意味で、重要視すべきだろう。

両者の語りは極めて対照的で、一方は（自覚的無自覚的かは措いて）経験した出来事を器用に編集しながらリアーナな物語を作り、女の浅ましさを誇張するような演出を過剰に施しているのに対し、他方はその誇張された物語に肯定も否定もせず、「蕪雑な手紙」に「多くの真実」を感じながらも、私見を交えず沈黙と共に読者に解釈を丸投げする形で私信公開の手続きをする。

リゾート化という近代的現象のなかに投げ込まれ、それに翻弄された男。自身の専門分野数学ではなく、それと代替するかのよう、文学へ移行していく男。このような男を前に、繰返しになるが、「自分」が何を思ったのかは分からない。

しかし――ここからは仮説になるが――、この接触自体を対象化することは許されるかもしれない。つまり、物語の場所そのものを作った「自分」と「手紙」との接触のことだ。それを我々は領域接触の第三レベルと名づけられようが、第三レベルはより簡単に、物語のメタレベルと換言できる。そしてこのメタレベルは太公望の哲学の第三の要点、場所の如何に関わらず、純偶然性と呼ぶべき奇跡のような遭遇は残存してしまい、それを操作することはできないという偶然性の本質と呼応している。場所によるサポートを得ずとも、ある特別な遭遇は起こってしまう。「自分」が感じた「多くの真実」には、普通の文学者ならば一顧だにしないだろう「美文家ならざる此蕪雑な手紙」そのものとの出会いへの感傷が含まれているのかもしれない。

以上、私見を中心にして『鎌倉夫人』に内在する太公望の哲学の具体相を分析してきた。私見では、『鎌倉夫人』には太公望の哲学が貫徹されている。しかし、それでは、他の独歩のテキストではどうだろうか。同様の読みが可能なのか否か、或いは太公望の哲学と無関係なテキストがあるのか、あるとすればそれはどのような条件によっているのか。このような問いの方向性は独歩文学に新たな視角を切り拓くことに寄与することだろうと思われる。

(註一) 手近なものでは雑誌の独歩特集号、『解釈と鑑賞』の昭和五七年七月や平成三年二月に付されている目録などを参照。前者は片岡懋、後者は中島礼子が作成している。

(註二) 平野の他にも、坂本浩『国木田独歩』(有精堂、昭四四・六)なども同様の見解を提出している。即ち、「信子に『不幸なる精神的不具を明識せしめ』て、彼女を指導しようと考えていた独歩は、この作〔『鎌倉夫人』〕に於いても鎌倉夫人に忠告しようという気持が一寸動いたが、くるりと背を向けてしまっている。小説自体としては不完全なものであるが、作者の女性観を見る上には忘れてはならない作品である」。

(註三) 数学では処理できないもの、数学の限界は『鎌倉夫人』と同時期のテキスト『運命論者』(明三六・三)でも示されることになる。というのも、数奇な人生を辿ることで運命論者となった主人公高橋信造は、運命を信じない聞き手の「自分」を「数の連続を以てインフィニティー(無限)を式で示さうとする数学者のお仲間」と分類し、それに反駁するかのように自身の半生を語り始めるのだ。舞台も『鎌倉夫人』と同じ鎌倉ということで両テキストの比較は興味深いが、本論からずれる為、ここではこれ以上考察しない。

(註四) 短編小説『牛肉と馬鈴薯』(明三四・一一)には「女といふ動物は三月たつと十人が十人飽きて了う」という文句があるが、本論でも挙げた『病牀録』でも「女は禽獣なり。人の真似をして活く。女を人類に分類せるは旧き動物学者の謬見なり」と述べている。又、鎌倉蟄居時代に盛んにその論を展開していたことは原田秋浦が伝えている(「不遇時代の独歩君」／『中央公論』明四一・八)。詳しくは小野末夫『国木田独歩論』(牧野出版、平成一五・九)第十章や、中島礼子『国木田独歩の研究』第五部第一章などを参照。

(独歩のテキストの引用は『定本国木田独歩全集』(学習研究社)を使用した。但し、旧字は全て新字に直した。尚、引用文中にある〔〕は引用者の注記補記である)。

(2012.1.1)

国木田独歩、偶然性の場所——『鎌倉夫人』における遭遇の構造について

——

<http://p.booklog.jp/book/41589>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41589>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41589>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.